世界一周の夢を実現したパイオニア群像

――東京・大阪両朝日新聞社主催「世界一周会」によせて――

竹村民郎

第一章　世界旅行の夢

東京・大阪両朝日新聞社共催による第一回「世界一周会」について、一九〇八年一月一日の『東京朝日新聞』（以下『東京朝日』と略す）はつぎのように報じている。

空前の壮挙　昨年の正月我社は世界第一の新聞紙たる倫敦（ロンドン）タイムスと電報送受の約成れることを発表したり、今年正月又其の道に於ては世界第一の稱ある倫敦某社と特約して此に一大世界的壮挙を発表し以て聊（いささ）か我が読者平生の眷顧（けんこ）に酬ゆる所あらんとす、一大世界的壮挙とは如何、曰く朝日主催世界一周会是なり、世界一周会とは前半のロセッタ丸満韓巡遊の計画を拡大したるものにして我社が精細なる調査の結果最短の時日と最少の費用とを以て最快最捷の道に依って欧米の各都市を巡覧すべき便利を供せんとする者なり、若し夫れ其の計画の詳細に至っては請ふ本社が遂日公にせんとする所に就て見られよ

今日からみれば、大げさで古風な社告である。文中に述べているロセッタ丸満韓巡遊の計画とは、一九〇六年、東京、大阪両朝日新聞社主催で実施された我国初の団体旅行としての満韓地方戦跡視察団のことである。社告がここで言っていることは、要するに朝日新聞社が「ロンドンの超一流の旅行社と提携して、今までに類例が無く、スケールの大きい世界一周旅行を提供する。旅行日程は最短であり、旅費も最少の費用でもって欧米の都市を回遊する」ということだ。文中で述べられている「世界第一の稱あるロンドン某旅行社

とは、どこのことなのだろうか。それはロンドンのトーマス・クック社（以下クック社と略す）のことである。クック社（一八四一年設立）の創立者のトーマス・クックは、一八五一年のロンドン万国博覧会、五五年・六七年のパリ万国博覧会、七三年のウィーン万国博覧会などの開催のおり、観光団を組織して、大衆を博覧会観光に動員した。団体ツアーを楽しんだ人々の発言が生きた広告となって、クック社の事業は目覚ましく発展した。クック社のロンドン事務所の一階には旅行用品の売場があり、上階は禁酒ホテルとなっていた。クックは決して成功に満足せずつぎつぎに旅行業の革新を行った。例えば彼はこれまでの「周遊券」と「ホテル・クーポン」を組み合わせて、「インクルーシブ・ツアー」（包括旅行）を提案した。現代の旅行クーポン制度を先どりした「インクルーシブ・ツアー」は、クック社の利益を飛躍的に増大させたのみならず、同社に対する国際的信用は一挙に高まった。一八九〇年代初頭、世界各地で一二〇〇のホテルが、クック社のクーポンを扱っていた[1]。クック社は「近代旅行の守護神」と称され、二〇世紀初頭には世界一の旅行社に成長した。当時クック社の総本社はロンドン市に在ったが、事務所は世界各地に設けられ、其数は一四六に及んでいた。一九〇七年三月クック社の事務所が初めて我国の横浜市にも開設された。

現代の『朝日新聞』は、『ニューヨーク・タイムズ』『ロンドン・タイムズ』『新華社』等と肩を並べる国際的な新聞社だと言えるだろう。しかし二〇世紀初頭、朝日新聞社はニュースの国際性、論説の水準、新聞記者の報道に対する意識など、どれをとっても欧米の新聞社の水準にははるかに及ばなかった。したがって当時朝日新聞社が単独で世界旅行ツアーを提案することなど、簡単にできることではなかった。まさに朝日新聞社が「世界一の稱ある」クック社と特約し、その世界的ネットワークの全面的支援を得ることによってのみ、「世界一周会」の提案を実現することができたのである。

ところで朝日新聞社による「空前の壮挙」の第一回「世界一周会」とは、営業政策的にどんな意味があったか。二〇世紀初頭の日本は日英同盟締結（一九〇二年）や日露戦争（一九〇四―〇五年）に勝利して、国民の気分は昂揚していた。帝国の政治的役割の増大と、新しい経済的好機に直面して、幾千人もの実業家がそれぞれの領域においてイノベーションに積極的に挑戦していた。この時代の産業化を促進した顕著な要因は、教育の目覚しい発展である。一九〇七年、小学校令が改正されて義務教育年限が延長された。大学・高等学校・中学・女学・工業・商業等の中等学校教育の発展は、技術や経営システムの革新を積極的にうながす効果を果たした。大都市に住み中等学校卒業以上の学歴をもつ人々が、社会の様々な分野に進出した。彼等は二〇世紀初頭の時期、今日のサラリーマン社会の原型のようなものをつくりあげるのに貢献した。彼等こそまさに実業の思想の担い手であった。実務的知識人の大量出現は、新聞を読む

能力、リテラシーの向上を促した。朝日新聞社はこうした社会の変化に対応して、いわゆる戯作者風を脱したポピュラーなコミュニケーションへの脱皮をはかった。一九〇七年四月一日第一高等学校教授・東京帝国大学英文科講師夏目漱石の東京朝日新聞社入社、同年『大阪朝日新聞』による八段関根金次郎対六段坂田三吉の将棋対局の掲載、一九〇八年「世界一周会」の提案等はその重要な一環であった。つまり『朝日新聞』は指導者層・エリートが読む部分と、マス・大衆向けの紙面との二面性をもった「マス・エリート」の新聞としての基礎を、この時代に確立したのである。

しかし一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての時代を世界一周ツアーという一つの視点からみるならば、それは世界一周ツアーが、世界的に定着し始めた時期であったことに気がつくであろう。すなわち一八七二年「ル・タン紙」に連載されたジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』（Jules Verne, *Around the World in Eighty Days*, 1873）（図1、仏語版）や、チャールズ・カールトン・コフインの『我々の新しい世界一周の通路』（一八六九年）そしてウイリアム・H・シューアード『世界一周旅行』（一八七三年）は、園田英弘氏が言われるように、一九世紀後半の時代に生きる人々が「世界一周」という言葉に引き寄せられる契機となった[2]。二〇世紀初頭世界の先頭を走っていたのは、アメリカ合衆国であった。この時期主として南・東ヨーロッパ諸国やアジアからアメリカ合衆国や南米諸国等へ、大型客船を利用した、膨大な移民の移動が始まった。大洪水のごとき移民の大移動、鉄鋼、造艦、造機、化学、交通、電気、兵器などの諸産業の目覚ましい技術革新、一八九八―一九〇〇年ドイツ艦隊政策の展開に典型的に示される列強の建艦競争、一八九八年米西戦争、翌九九年ボーア戦争に象徴される帝国主義戦争等々の要因が、大型装甲戦艦のみならず、一九一一年就航のオリンピック号（四万五三二四トン）や、一九一二年就航した悲劇のシンボル、タイタニック号（四万六三二九トン）等の大型客船の就航を促した。これらの大型客船はラクジァリイ・シイップと称されたように、一等船室の船内装飾は海に浮かぶ宮殿のように豪華であった。しかしこれに反して大量移民を収容するための船室は、それと比べると天と地ほどの差があった。欧米のブルジョアや各界の名士等は競って、こ

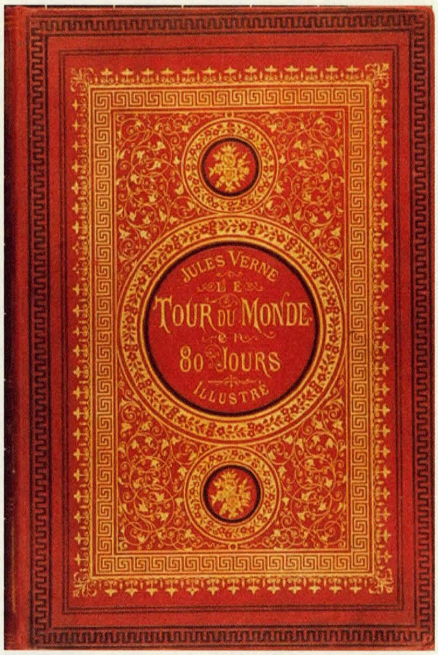

図1　『八十日間世界一周』仏語版（Jules Verne, *Le Tour du monde en quatre-vingt jours*, 1873）の表紙（国際日本文化研究センター蔵）

れらの大型客船で大西洋・太平洋横断の観光旅行や、世界一周の旅に赴いた。一九〇八年一月二三日付、『東京朝日』紙上で、人望の高かった尾崎行雄東京市長は「世界一周会」の企画についてコメントを求められて、つぎのように述べた。

吾輩は曾て八十日間世界旅行と云ふ未来記的の本を読んで当時多大の趣味を感じたと云ふよりも寧ろ驚いて居った位である、然るに今日之わが現実に行わるゝことになったと云うことは更に時代の進歩に驚かざるを得ない。

『八十日間世界一周』の著者ヴェルヌ自身は世界一周の体験はなかった。つまり彼は『ブラッドショー大陸蒸気列車時刻表及び総合ガイド』や、雑誌『ツール・ド・モンド』等の旅行情報に依拠して、『八十日間世界一周』を執筆したのである[3]。ヨーロッパの旅行案内書に関連して一言付け加えるべきことは、旅行者にとっては便利な案内書であったドイツのベデカ社発行のガイド・ブックは、一八五九年より仏語版、一八六一年より英語版を出すに及んで、世界各地に普及した。さらに言うならば、一八八〇年リッツのチェーン式ホテルの出現、そしてクック社やヘンリー・ウエルスが一八五〇年に設立したアメリカン・エクスプレス会社等の旅行斡旋業が、目覚ましく発達したことも、一九世紀の後半における世界一周旅行の促進上大きな役割をもったのである[4]。

話を二〇世紀初頭の時代にもどすと、この時代は一九世紀後半とは異なり、交通・観光システムの整備、その他旅行上の便宜が加わって、世界一周旅行がようやく盛んになり始めていた。前述した尾崎東京市長が驚嘆したように、我国でも世界一周ツアーの実現が日程にのぼっていたのである。今試みに私は書庫に所蔵している『東京朝日』縮刷版一九〇九年を見ると、後半期のみでも二件の世界一周観光団が来日したことを発見できるのである。即ち七月二一日付『東京朝日』は、アメリカのハースト新聞社主催の「急速世界一周」の第二隊が、二〇日、シベリアを経て敦賀に到着したことを報じている。また一二月六日付記事によると、ニューヨーク市フランク・シー・クラアク社主催による七〇〇人の大世界漫遊団が、二九日、一万八〇〇〇トンの新汽船クリーヴランド号で長崎港に入港予定とある。相次ぐアメリカの世界一周観光団の来日に勢をえて、東京・大阪両朝日新聞社は、「海外旅行の容易にして且つ安全に行わるべきを知らしめん」とする趣旨で第一回「世界一周会」（以下「世界一周会」と略す）を実施することを決意し、一二月一五日に社告をもって、つぎのように報じた。

我社は日英博覧会見物の便に供せん為め来春を以て再び世界一周会を催さんとす詳細は明年元旦の紙上より追々発表すべし

東京・大阪両朝日新聞社は、読者の歓心をひくための手段として、既に一二月九日付社告で、明年一月元旦の本紙に特別付録として、中村不折画、前田黙鳳書の『日英博覧会見物世界一周双六』（説明付帙入）をつけることを表明していた。こうしたエピソードからも、二〇世紀初頭の時代は、欧米諸国を先頭に我国もまきこんで、世界一周の観光旅行が華々しくくりひろげられていたことが、垣間見られるだろう。

二〇世紀初頭の海外旅行には、航空機はまだ登場していなかった。したがって東京からパリに行くためには、シベリア鉄道を利用する二週間のつらい旅か、本格的遠洋航路である欧州線の船旅が必要であった。東京―パリ間（大連経由）の二等急行列車運賃は二九一円五五銭、当時小学校教師の初任給は二五円程度であったから、パリ旅行は庶民にとって文字通り高嶺の花だった。当時の鉄道院（ＪＲの前身）が、ワールド・トラベルの取り扱いを始めたのは、一九一二年である。ロンドンよりアメリカ・カナダを経て東京に達し、さらに東京からシベリア鉄道を利用して、サンクト・ペテルブルグ、またはモスクワに至るコースであった。図２は一九一三年鉄道院が発行した『日本西欧間連絡運輸案内』である。『運輸案内』はえらそうな調子で、シベリア急行列車やモスクワ発西欧行普通急行列車の案内を述べている。例えば同案内書の説明によると、モスクワ発西欧行普通急行列車の乗客は「途中ワルシャワ及ベルリンに於て乗換を要することなるがワルシャワにては其到着駅なるブレスト停車場よりコベリ停車場（発車駅）までの間は旅客自ら便宜の方法に依り乗継ぎの手配を要すと知るべし」とある。参考までに書いておくと、二〇世紀初頭、日本―西欧間は、汽船よりシベリア鉄道を経由するほうが速かったのである。一般に外国語の会話能力が貧弱であった当時の日本人乗客が、仮にこうした紋切型の説明書を読んだと仮定してみよう。彼はこの説明書の指示のみで、果して複雑な国際線の乗換えに成功できたであろうか。彼はモスクワのブレスト停車場で下車し、一時荷物を預け市中見学の後夕方の列車で、西欧行普通急行列車で西行することになるだろう。しかし下車後彼は荷物をどこへ預けてよいのか全く見当が附かない状況に直面する。なぜならばロシアの停車場には荷物の一時預かりをするクローク・ルームというものがないからである。そこで彼は駅のポーターに交渉し

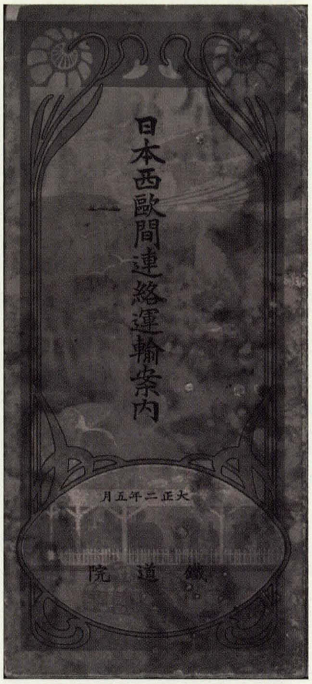

図２　鉄道院『日本西欧間連絡運輸案内』1913年（筆者蔵）

なければならないが、恐らくロシア語しか話せないポーターに自分の荷物を一時預かってくれるように交渉することは、ロシア語が話せないかぎり困難である。もし彼がなんとか荷物をあずけることに成功したとしても、その後両替の手続きや、ヨーロッパの友人に送迎依頼のために、ロシア語で電報を打電するなど、難問山積の状況に直面せざるをえない。このように考えると、語学力の貧困な日本人旅客が、単独でシベリア鉄道経由で訪欧することはまず考えられない。当時それが可能だったのは、語学力に秀でた超エリートに限られていたということをあらためて思い知らされる。一九一〇年、そんなエリートの一人として『大阪朝日』特派員長谷川如是閑（長谷川如是閑『倫敦（ロンドン）！倫敦（ロンドン）？』［岩波文庫、一九九六年］参照）は、単身シベリア鉄道経由で渡欧している。

第二章　世界一周旅行という商品の開発

『東京朝日』が「世界一周会」の最終計画を発表したのは、一九〇八年一月一一日であった。その計画の中の一、旅行日程、二、旅費、待遇、三、会員数及入会規則、四、旅券及旅装の概略はつぎの通りである。

旅行日程。三月一八日、横浜港出発（パシフィック・メール社の北太平洋定期客船モンゴリア号 Mongolia［一三六三六トン、竣工一九〇四年、一等定員三五〇人、二等定員六八人］）以降ホノルル経由で太平洋を横断し四月三日サンフランシスコ到着。同五日サンフランシスコを出発し、シエラ・ネヴァダを越え、同六日にはソルト・レークの湖水を渡って、湖畔のオグデン到着。その後同九日、シカゴから同一三日、ナイヤガラの瀑布を見た後、同一四日、ボストン到着。同一六日、ボストンを出発し、翌一七日、ワシントン着、同一九日、ワシントンを出発しニューヨークに到着。同二三日、イギリスへ出発、大西洋を航行し五月一日、リバプール港着。それより汽車にてロンドンへ出発。同一日より一五日まで、ロンドン滞在。同一六日ロンドンを出発し、ドーバー海峡をへてパリ着。同一七日より二〇日までパリ滞在。同二一日、パリを出発し、二二日、ベルリン到着。同二三、二四日、ベルリン滞在。同二五日、ベルリンを出発、翌

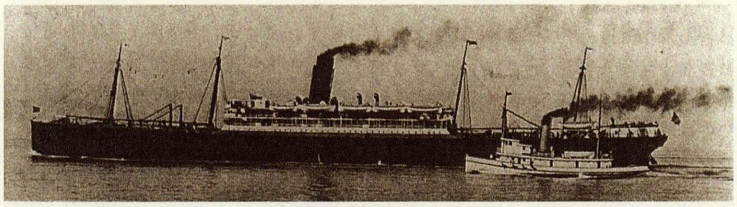

図3　パシフィック・メール社のマンチュリア　モンゴリア級の二番船として1904年6月に竣工した。（三浦昭男『北太平洋定期客船史』出版協同社、1994年より）

二六日、ペテルブルク着。同二七、二八日、ペテルブルク滞在。同二九日、ペテルブルグを出発、モスクワ着、同三〇日、モスクワ滞在。同三一日、シベリア鉄道の急行列車にて、モスクワを出発。六月七日イルクーツクに到着。同一二日ウラジオストックに着、翌一三日、ウラジオストック出発、日本海を航行し、同一五日、敦賀へ帰着。

横浜（又は神戸、長崎）出発から敦賀へ帰着するまで、旅行に要する総費用は二一〇〇円。

週刊朝日編『続続値段の明治大正昭和風俗史』（朝日新聞社、一九八二年）によると、一八九九年、国会議員の諸手当を含まない報酬は二〇〇〇円であった。この報酬と比較しても、世界旅行費用というのは、極めて高額であったことが理解されるだろう。

待遇。日本よりイギリスに至る間は、汽車、汽船とも一等とする。ヨーロッパ観光中及シベリア鉄道は、船車とも二等、ウラジオストックより日本までの汽船は一等とする。

会員数及入会規則。会員は二五名以上五〇名以下とする。朝日新聞社は会員がなるべく全国各地から参加することと、多様な職業の会員の応募を期待していた。このため朝日新聞社はあらかじめ応募した人々の中から、会員にふさわしい人物を選択する権利をもつことを明らかにしていた。

旅券及服装。旅券は各自地方自治体に出願し受取ることとし、旅行中会員は皆洋服を着用することを義務づけていた。またフロックコート及燕尾服一着の持参及び婦人には和服、草履の着用を認めた。

この計画案は色々と会員に対する注文の多い代物だったが、さすがにクック社のプランを下敷にしただけに、リーズナブルで行きとどいた企画であった。ヨーロッパ通の知識人のなかには、ヨーロッパ文明のルーツであるローマの観光を欠落させているなどと批判する者もいたが、概ね各界の識者にはこの企画は大いに受けた。一九〇八年まで憲政本党総理であった大隈重信は、早速一月一二日付『東京朝日』で「是実に快事なり予は直に之をアメリカの知友に報道すべし日本紳士五十人一隊を為して欧米を旅行すと聞かばアメリカにても到る処大評判にて大に歓迎さるべし殊に婦人の旅行は美事なり」と、「世界一周会」の計画を賞讃した。日英同盟締結のよしみもあって、東京駐在英国大使サー・クロード・マックスウェル・マクドナルドも、一月二一日付『東京朝日』に、「世界一周会」にメッセージを寄せている。

私の最も熱心に忠告したい点は英語の稽古です今迄の申込者中

には外国語の出来る方が甚だ少いとのお話ですが私は此際申込者が出発迄の時日を利用して少しでも英語を稽古して貰いたいと思います。何うせ短時日の間に充分のことは無論出来ませぬが一寸した挨拶や何でもない日常の単語を十か二十心得たばかりでも大変な役に立ちます巡査に道を尋ねる言葉だけ知って居てもどれ位便利だか知れませぬ。だから私は是非今から五六十日の間に少しでも英語を習って置いて貰いたいと思ふのであります

自信満々、「大英帝国の指導者」の傲慢と偏見をちらつかせながら、マクドナルド大使はメッセージで、「世界一周会」の会員たちに手厳しく英語の稽古を要求したのである。前述したように、二〇世紀初頭の時代は商工業の目覚しい発展を背景として、社会全体に、裕福な「市民」というものが成立した時代であった。まさに「世界一周会」に応募した人々は、そのような勝ち組に属する人々であった。彼等は気分的に日英同盟の支持者であり、レディとゼントルマンを目標にした教育を理想としていたにも拘わらず、英国大使が指摘しているように、大半の者は英会話が苦手であった。

彼等と比較するのはどうかと思うが、一九世紀後半から二〇世紀にかけての時期、官費で外遊したエリートたち——東郷平八郎（海軍）、武田秀雄（海軍）、中島知久平（海軍）、児玉源太郎（陸軍）、石黒忠篤（農林官僚）、上杉慎吉（東京帝大）、吉野作造（東京帝大）、池田菊苗（東京帝大）、そして作家の森鷗外や夏目漱石等は、語学力を身につけ、とにかく自前で海外諸国を視察して知識や技術等を習得して帰国した。二〇世紀初頭の時代は都市化の目覚しい発展を背景に、最初のヨーロッパ化現象が定着する時期である。都市化の発展に対応して、洋行帰りのエリートたちがオピニオンリーダーとして、あらゆる領域で本格的に活躍し、軍の合理化のみならず開かれた都市文化の形成や産業民主主義体制の合理化に貢献した。このような一握りの洋行帰りのエリートたちの輝きを増す多彩な実績からみれば、語学も十分にできずに、「世界一周会」に応募した大半の会員たちは、結局のところ付焼刃的なパフォーマンスでしかなかったと言えるかもしれない。しかしたとえそうであったとしても、彼等の何でも見てやろうというエネルギッシュな好奇心と楽天主義的な精神は、評価する必要があるのではなかろうか。つまり彼等は国際観光ツアーのパイオニアであったということである。

一九〇八年三月一三日付『東京朝日』に掲載された「世界一周会」の会員名簿を見たかぎりでは、五三名の会員の大半は実業家であったが、その他あらゆる職業の人々が網羅されていた。前代議士、地方自治体議員、地主、機業家、生糸問屋主、漁業及酒造業者、マッチ製造業者、銀行重役、『上海日報』社長、茶業商、時計及貴金属商、メリヤス製造業、大阪高等商業学校教授、株式現物売買問屋主、

美術品雑貨商等々。特筆すべきは一行中に、市会議員、株式仲買人梅原亀七の妻、梅原柳子、美術雑貨商野村洋三の妻、野村美智子、及び日米銀行の南部夫人の合計三名の女性が参加していたことである。会員中のもっとも高齢者は六五歳、最も年少者は一六歳であった。一行中曾て外遊を経験した者は僅か二名であった。新聞社側は世話役兼案内係として、大阪からは土屋元作（大夢）、東京からは杉村広太郎（楚人冠）が加わった。外に会員兼通訳ともいうべき雑誌記者の久留島武彦が、終始会員たちの面倒をみた。さすが東西両朝日新聞社ネットワークを活用して組織され、さらにトーマス・クック社が全面的にバック・アップした世界一周ツアーであったから、我国最初の快挙とはいっても、いたれりつくせりのサービスで、全員はなに一つ不便を感じることもなく、快適な世界旅行へと勇躍出発することとなった。

「世界一周会」の関東会員が東京を出発する日、三月一九日は朝から雨であった。「ツアーには門出が大事」と東京朝日新聞社は、午前八時より日比谷公園で数十発の花火を打ち揚げた。「世界一周会」の会員と三〇〇人の見送り人が、新橋駅に到着する頃、再び数十発の花火が景気良く打ち揚げられた。新橋駅を出発した一行は、一〇時二〇分、横浜駅に着いた。一行はそれぞれ緑の杉の枝、紅のリボン、匂い薫しき沈丁花で周囲を飾られた馬車、又は人力車、徒歩などで、横浜休憩所に指定された西村旅館に赴いた。一行の人々は西村旅館に用意されたシャンペンの盃をあげ、ビールを抜いて、互いに健康を祝したり、訣別の言葉を交換した。当時の新聞記事を読むと、そこに集う意気盛んな会員たちの想いを濃密に伝えている。やがて時刻が近づくと、一行は西村旅館から横浜港へと移動した。「世界一周会」の会員は見送人の歓声と、門出を祝う楽隊の演奏に送られて、既に神戸港から乗船していた関西会員の乗船しているモンゴリア号へと向かった。この時、陸上では最後の花火が数十発連続して打ち揚げられた。午後四時一〇分、モンゴリア号は錨をあげて徐々に横浜港を離れた。「世界一周会」の会員として、モンゴリア号に乗船していた有価証券現物仲買商野村徳七は、三七歳であったが、心中は燃ゆるがごとき青年の熱意と知識欲で満ちていた。彼は大阪市北浜の証券街では当時名の知られた株式店を経営する三一歳の実業家であった。この頃「株屋」あるいは「相場師」という言葉は、うさんくさい商売をやる人々を指していた。野村はこれらの言葉が大嫌いであった。彼は店員には背広を着用させ、何本もの電話で商いを行い、他店よりはやく女子店員を採用するなど、合理的経営方針を採用した。彼は大枚をはたいて世界一周の旅行に参加したのを境に、欧米の金融市場を視察して新しい知識を吸収しようと決意したのである。彼は野村商店に宛てて、航海第一日前の感想をつぎのように書き送った。

乗船時の愉快、出発の壮快、航海第一日の快感、身に余る光栄、何れも生まれてより始めてならぬはなく、遙に諸君の御厚意を謝し候[5]

大型客船モンゴリア号の甲板に立ち、はるかに麗峰富士や箱根、丹沢の山々も指呼の間に望みながら、野村は心の底から湧き上がる瑞々しい生命力を感じたにちがいない。ついでに書いておくと、外遊後野村は猛然と企業の合理化に乗り出した。野村はニューヨークのウォール街や、ロンドンのロンバード街等の証券・金融センターを見聞して、あらためて証券業は経済情報や商品知識に基づく合理的なビジネスであることを学んだ。彼は調査部を強化する一方、日本で初めての『株式年鑑』を出版して顧客に無料で配布した。又彼は丁稚出身の店員ばかりではだめだと、「学校出」の社員の採用を始めた。さらに店員の自己売買を厳禁した。最近、野村証券勤務の中国人が在日の同胞二人と共にインサイダー取引で逮捕された。証券業の品位の向上を図るために献身した創業者野村徳七の国際化を目指す志はどこにいったのであろうか。

第三章　日本発見のプロローグ

パシフィック・メール社はモンゴリア号を「東洋へのサンシャイン・ベルトを走るビッグ4」と呼んだ。パシフィック・メール社の誇る巨船モンゴリア号による太平洋航路の船旅を体験した「世界一周会」の会員たちの様子はどんなものであったろうか。五六名の会員は二六の一等船室を占領した。廊下、デッキ、喫煙室、音楽室など船内のいたるところに、右往左往する会員の姿がみられた。アメリカ船内で、このように日本人同志のさざめき合いが聞こえたのは、極めて珍しいことであった。船内では日本人乗船客へのサービスとしてダイニング・ルームのメニューは日本語で書かれ、晩餐毎に米の飯と、日本茶が用意されていた。会員たちは外国船にもかかわらず、客の要求があれば直ぐに醤油がテーブルに備えられ、食品名の不明なものには、日本人給仕が一々これを説明してくれるなど、用意周到なサービスに充分満足した。会員を驚かせたのは、洋上の大暴風雨が、想像を絶するほど烈しかったことであった。四月一三日付『東京朝日』の特派員杉村楚人冠（以下楚人冠）はつぎのように報道していた。「三月二十二日……流石の大船も此日は動揺頗る烈しく食堂内の人影稀疎を極めたり、前日屢甲板を洗へる波浪は更に廊下を犯し便所に闖入」このため会員は「食卓に就けども食思全く欠け臥床に入れども眠殆ど成らず痩我慢の強き者は僅に喫煙室内に将棋を戦はし碁を囲みて無聊を慰め」る有様であった。横浜港出航後六日間にして、はじめて暴風雨はおさまり、モンゴリア号はようやく静穏な洋上を航海することができた。「世界一周会」の会員た

ちも、この頃になるとようやく船内生活にもなれてきた。モンゴリア号の船内は、欧米人が「フローティング・タウン」と称したように、さながら海上に浮かぶレジャーの宮殿であった。船中に医局、音楽室、談話室、図書館、喫煙室、運動場、販売店、理髪店、入浴場、食堂等の設備があるのみならず、一等船室と談話室との間の中庭には、植木鉢等が置かれ憩いの空間になっていた。会員川田鉄彌は、四月二〇日付『東京朝日』のなかでつぎのように書いた。

天海万里の異郷にて、上流社会の人々と交はらんには、服装其他万端に意を用ひて、母国の国旗を恥かしめざること最も肝要なるべし。

くつろぎと社交においても、祖国を意識した会員たちにとって船内で出会う欧米人は近代化のシンボルで畏敬的存在であった。彼等と交際するからには、立居振舞にも細心の配慮を払ったのである。

モンゴリア号は三月二七日、ハワイのホノルル港に到着した。「世界一周会」一行は同日午後六時、ホノルル市第一のホテルであるアレキサンダー・ヤングホテルで開催された晩餐会に出席した。一九〇八年四月三〇日付『東京朝日』は会場の様子を説明した文章のなかで『ハワイ新報』社の芝氏がハワイ談頗る人の注意を惹けり」と述べた。同紙にはその講演内容の要約が掲載されてはいないので、私がここに紹介することは残念ながらできない。しかし一八九八年、アメリカ合衆国のハワイ併合以降、ハワイ在留邦人の地位と生活様式は大きく変化しつつあった。まず日本とハワイの関係は当然日米条約及びアメリカ合衆国移民法の管理を受けることになった。その結果契約移民が廃止され、従来契約制に束縛されてきた日本人移民は一挙に自由の民となった。またカリフォルニア州の排日運動の結果、一九〇七年二月、ハワイ移民のアメリカ大陸転向が禁止されたのみならず、翌一九〇八年二月、日本外務省がハワイ移民を停止（呼寄せ移民を除く）した。

ところで一九〇二年ごろを境に在留法人数は六万人をこえ、彼等は一年に約五〇〇万円を日本に送金できるようになっていた。日本人移民社会に「永住」への強い意志と、一定の市民性がひろく芽生えた。そのような方向をもったものとして、一九〇四年、エワ耕地、ワイパフ耕地における日本人労働者のストライキ、一九〇九年、第一次オアフ耕地における日本人労働者の大ストライキ、或は牧師奥村多喜衛、医師三田村敏行たちによる『ホノルル新聞』を武器として展開された廓清運動等をあげることができる。まさに二〇世紀初頭の時代は、日本人がハワイ移民問題を皮膚感覚として実感していた時代であった。さらに言うならば、ハワイ在留邦人社会の激動する運命の転回をかたづをのんで見守っていたというのが、日本国民の一般的な心情であった。それだけに「世界一周会」会員たちは、

『ハワイ新報』の日本人記者による生きた現実と熱気を包みこむようにして語られたハワイ近況報告に、心をうたれたに違いない。

「世界一周会」は四月三日、サンフランシスコに到着した。当時は前述した排日運動の気運がもっとも高揚していた頃である。私は名記者楚人冠が五月六日付『東京朝日』に執筆した『米国日記　サンフランシスコ見物』に、二つのことを期待した。一つは会員たちがアメリカ人の排日運動をどう思ったかについてであり、もう一つは在留邦人社会の現状についての率直な感想である。しかし楚人冠の文章はなぜかこれについてふれられていない。だが野村徳七会員は後年自ら日記をもとにした『つたかづら』を題する自叙伝において、「排日運動の渦中にありましたこの土地の印象は、我々にとって愉快なものではありませんでした。」と記した[7]。彼の文章はほんの数行であるが、当時の日記をもとに書かれているだけに、その文章が示唆するところは深い。

そこであらためてさきの「米国日記」と題した楚人冠の文章を考えてみよう。彼は「世界一周会」一行を迎え、歓迎ムードにわくサンフランシスコの様子をくわしく伝えた。再びくりかえすと、野村が指摘していたような排日運動は全く説明していない。本来「観光」という言葉の語源は、中国・周時代の古典『易経』にある「国の光を観る」である。つまり単なる行楽ではなく、国家の政治・文化・思潮と観光は不可分の関係にあるということである。その意味では楚人冠が「観光」の本質を捨象して、いわゆる提灯記事しか書かなかったことに、強い不満を覚える。

ところで「世界一周会」の大半の会員は、充分な海外知識、語学力ももたず、いわゆる他力本願の駈足旅行であったことは、前にも述べておいた。しかし彼等は共通して移民問題以降緊張の度を加える状況で、日本とアメリカの媒介者として立つべき自己の使命を、この旅でどう発見するかについて真剣に悩んでいたことはたしかであった。彼等は大統領や国務次官の招待、様々な歓迎宴そして観劇等の招待などに、「民間の親善大使」として、謹厳と微笑をもって振舞った。一行にとって最高の栄誉は、四月一七日、大統領に謁見したことであった。東京、大阪両朝日新聞社はルーズベルト大統領に感謝状を贈呈した。一同は順に列を作って、ルーズベルト大統領と握手を交わした。アナボア大学出身の大阪高等商業学校教授南熊夫は、大統領の問に応じて、会話を重ね大いに面目をほどこした。大統領夫妻がとくに感歎の声を絶たなかったのは、和服姿の三人の日本女性が打ち揃って、優雅な物腰で挨拶したことであった。

「世界一周会」の会員たちの滞在中のアメリカは、いかなる状態を示していたか。二〇世紀初頭の時代は、フロンティアの消失とともに、産業資本の発展期から集中と寡占へと向かうアメリカ（一八九〇年シャーマン法［独占禁止法］の成立を見よ）であった。この時代のアメリカはまさに現代アメリカの原型が形成された時期で

あった。一九世紀のアメリカの問題は、これまで多くの学者が好んでとりあげた問題である、就中A・トクヴィル『アメリカの民主政治』（Alexis de Tocqueville, *Democracy in America*, 1835-1840）、およびJ・ブライス『平民政治』（James Bryce, *The American Commonwealth*, 1888）は、ともに不朽の名著に数えられていることは、周知の事実である。フランスの貴族であったトクヴィルの『アメリカの民主政治』が対象としたアメリカが、一八六一年の南北戦争前のアメリカであったのに対して、ブライスの『アメリカ共和国』が問題としたアメリカは、前述したごとき集中と募占へと向かうアメリカであった。ブライスの著書は、この時代のアメリカにおける政治、経済、社会、教育、宗教、生活文化、婦人の地位、民主主義が思想に及ぼす影響等の広い視野に立って分析し、アメリカ研究の総合的な体系構築に、確固とした方向を示した。ブライスの著書はヨーロッパにおける根強いアメリカ蔑視の傾向に対して、イギリス人として終止符を打った劃期的な研究書である。

例えば、ブライスの『平民政治』は第一〇一章で、ウォール・ストリートを論じたのであるが、その中に「此資本と智力とは今すでに英京倫敦の資本と智力とに匹敵すべき者にして、多年を出でざるに両半球上に於る同種の場所に悉く凌駕すべき運命を有す、ウヲール街は萬般の亞米利加商業の神経中枢なり」[8]と述べている。ブライスは近い将来にウォール・ストリートは、世界経済の中枢になると、明快に見通していたのである。まさに一九世紀末期以降の世界経済の方向は、アメリカ・デモクラシーの活力とウォール・ストリートの擡頭の中に求められていた。当時の『ニューヨーク・タイムズ』は、ブライスの著書の書評において、「嘗て一英国人、否恐らくは英国そのものによって与えられた贈物のうちで、最も意義深く、又最も感謝に価するものであると云っても決して誇張ではあるまい」と激賞した[9]。しかし「世界一周会」の会員中の大半の者は、こうしたアメリカの確乎とした国際地位を正しく確認することはなかった。彼等はアメリカ国内観光において、都市の市街電車事業の目覚しい発展や、電車による郊外開発の推進の実体、雄大な自然環境、個性と平等意識にあふれた生活文化等をまのあたり見て、ただ圧倒され感歎するばかりであった。また彼等はデモクラシーが、大統領制を基礎とした政治的社会や経済活動そして、精神文化、風俗・習慣等にあたえる深い影響を実感することができた。会の花としていたるところで、歓迎の中心となった三名の女性会員のなかの一人、野村美智子（美術品、雑貨商）は、アメリカン・ウェイ・オブ・ライフについての感想をつぎのように述べていた。

アメリカの或中流の家庭へ招かれまして奥さんが室内の装飾など見せて遺ると仰やったのを私は突然にお台所の模様が拝見したいと申しましたら直に案内して呉れました。構造の便利は申

す迄もなく床などは坐ってもよいと思ふ程に綺麗です。一体西洋の料理は油の物を沢山遣いますのに何うして斬う綺麗かと不思議に存じましたが能く調べて見ると熱湯を十分に使へるから夫で綺麗に洗う事が出来るのです螺旋さへ捻れば沸返った湯が幾等でも出て来ます。是は羨ましい位で日本の中流のお家では年中左様沢山に湯を沸す事などは到底出来ません夫に布巾も殺菌的に洗濯をすると云うことですから見ても心持が宜しうございます。こんな事は些細のようでも私は大変感じました。[10]

二〇世紀初頭、日本家庭の台所改良は欧米と比較するとだいぶんおくれていた。薄暗い不潔な天保時代の台所の改良は促されたが、その改良の中心は、清潔と便利と採光であり、欧米の家庭の台所の如き、熱湯の自由な供給を利用した殺菌、消毒は高嶺の花であった。それだけに野村美智子がアメリカ家庭の台所の第一の長所として、自由な熱湯供給を挙げていることは、実に良く理解できる。

ここで注意しなければならないことは、大阪市の株式、証券取引の中枢である北浜を代表する株式、証券取引業者の野村徳七、高倉藤平、そして大阪高等商業学校教授南能夫は、さすがに経済専門家らしく、アメリカ旅行の最大の目的を、ニューヨーク市の株式取引所所在地で、アメリカ金融界の中心でもある、ウォール・ストリートの視察にしぼっていたということである。彼等はとくに米英の金融界視察に充分な時間をさくために、「世界一周会」と分かれた。その後野村と高倉は四〇日余りもイギリスに滞在して、一行より一ヶ月ばかりおくれて帰国している。さて本題にもどるとウォール・ストリートには、有名なモルガン商会やクーン・ロエブ商会、そしてナショナル・シティー、ガランティー・トラスト、ファースト・ナショナル、バンカース・トラスト等がずらりと顔を揃えていた。われわれはしばらくウォール・ストリートやニューヨーク市中見学における、野村の行動を追ってみよう。彼はまず株式取引所を訪ねている。当時株式取引所の取引員総数は一一〇〇名で、上場銘柄五〇〇種、一日の出来高五、六〇万株程度であった。彼はブロードウェイの一仲買店ポスト・エンド・フラッグを訪ね、一〇分毎にロンドンと直接通話出来る通信システムや、そのまま大蔵省の統計に採用されるという調査部の高水準の設備等を見学した。この日野村は日記につぎのように記した。

余り張り切ったこの日の見分は興奮を覚えて眠られず[11]

野村はなぜこのように興奮したのだろうか。彼が親しくニューヨークで学んだことは、モルガンの背後にファースト・ナショナルやバンカース・トラストがあるように、証券業界の健全な成長を計るには、金融機関相互の緊密なネットワークが必要であるというこ

とである。このアメリカ証券界の常識は、彼が以前から考えていたことと相通じるものがあった。曾て彼は「仲買人の品位向上」を叫び、暗黙のうちに証券取引即投機なりと心得ている日本の幼稚な証券業者たちと距離を置いていた。彼はウォール・ストリートを実際に見学し、あらためて今後の自分の生き方に大きな自信と勇気をもつことができたのである。彼は株式取引所見学の翌早朝、マンハッタンのセントラル・パークに出かけた。彼はそこで野宿している多数のホーム・レスを見て仰天した。五番街というニューヨーク屈指の目抜き通りに接した、セントラル・パークのホーム・レスの居住地域があることを観察して、彼は豊かなアメリカ社会の背後で、貧富の格差が拡大していることを教えられた。

こうしたニューヨークでの収穫は、彼の後半生に極めて多くの影響を及ぼした[12]。野村の日記には「ハーレム」についての記載がない。またインディアンの地位についても同様である。彼は黒人やインディアンが資本主義的生産の行進に踏みにじられていた現実に対して、どう考えていたのだろうか。私はかつて神戸市東灘区住吉本町のローズ・ガーデンに囲まれた宏壮な野村徳七邸跡に建てられたマンションに居住したことがある。それ以来経営史上の野村の軌跡にずっと注意をはらってきた。その結果私は証券界で「調査の野村」と称されたその経営スタイルや、一九二七年、大阪商科大学付置の大阪市経済研究所設置資金一〇〇万円をポンと寄附した野村のメセナ活動のスタイルの背後に、アメリカやロンドンへの赤毛布旅行の影響があることを充分に感じとることができるようになった。私のそうした研究は、竹村民郎・鈴木貞美編『関西モダニズム再考』（思文閣出版、二〇〇八年）に譲る。

第四章　ヨーロッパを読み解く

野村たちと別行動をとった「世界一周会」の一行は、濃霧の大西洋を越えて五月二日朝七時、リバプールに上陸した。一行は直に別仕立の列車で同日午後一時半、ロンドンに到着した。イギリス人の目からみて、「世界一周会」はどのように評価されていたのだろうか。一行がロンドンに到着するほぼ一ヶ月前の四月五日、『東京朝日』は近着したロンドン諸新聞の「世界一周会」についての記事を紹介していた。

> 東京日刊新聞紙中に於て最も進歩せるものの一なる朝日新聞は新年第一日の紙上に於て世界一周の挙を公にし国民の利便を計るの企てをなせり而して此旅行の目的は要するに中等社会をして諸外国を歴遊せしめ其見聞を拡むるの好機会を得せしめんと欲するに在り従来外国にて日本人を代表せる者は少数の外交家、文部省派遣の留学生及び苦力等の下等労働者に限り此等下

等労働者の米国及加奈陀（カナダ）に入込むもの頻々として続出せるより終に或部分に於て日本に対する非難の声非常に高くなれり顧うに朝日新聞今回の挙即ち教育あり且つ健全なる日本の男女（総数約五十名）を駆って一団となし以て之れに外国出遊の便宜を与へたるの挙は彼我の誤解を一掃するに與って多大の力あるは論を待たず

衆知のように五ヵ年の期間を附した日英同盟協約が調印されたのは、一九〇二年であった。当時この同盟は英国外交の非常な成功であると称された。しかし実際は日本の東アジアにおける帝国主義的地位を権威づけるものであった。一九〇五年日露講和会議のポーツマスでの開催と軌を一にして、第二回日英同盟協約が調印された。この時期日本は日露戦争に勝利し、韓国に統監府を設置して外交権を掌握した。今や東アジアにおける最強国はロシアではなく日本であった。そしてまたロシアはすでに敗北したが、之に代ってドイツの海軍力が目覚ましい発展をとげつつあった。英国の新しい軍事的脅威はここにあった。即ち日本の陸軍力を警戒するドイツを東アジアで威圧するために、イギリスは第二回日英同盟協約調印を利用したのである。当時のイギリス人は日英同盟協約締結の興奮から醒めてみると、新たに生じたアメリカ太平洋沿岸における日本移民に拘る日米両国間紛争や、東アジアにおける日本の満州や韓国の支配を手放しで許すわけにはいかなかった。だからさきの「世界一周会」についてのロンドン各紙の論評にも、日本に対する警戒と侮辱が入りまじった微妙なイギリスの対日感情が反映していたのである。

五月三日「世界一周会」一行は午前中はハイドパークおよびその附近を見物した。午後彼等は水晶宮（Crystal Palace）を訪ねた。一同は久しぶりに解放された気分で、各種の遊戯施設で遊んだ。水晶宮は本来、一八五一年、開催のロンドン万国博覧会の会場として建設された。会期終了後、私的投機会社がこの水晶宮を買収して、ロンドン南郊シデナムへ移築した。私的投機会社の意図は水晶宮を利用して、新しい大衆娯楽センターをつくることにあった。水晶宮の内部は古代のエジプトやギリシア、そして古代中国などの建築と装

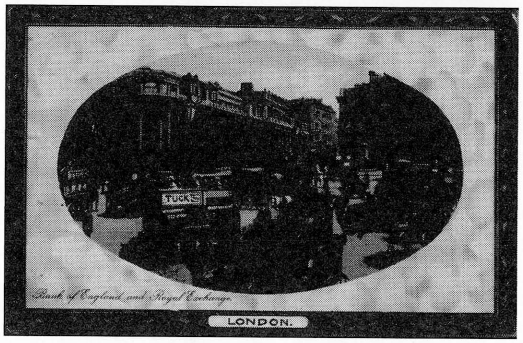

図4　絵葉書：国会議事堂とウェストミンスター橋（筆者蔵）
図5　絵葉書：イングランド銀行（筆者蔵）

飾の展示室や、座席数四〇〇〇のコンサートホール、そして工学模型のギャラリーなどが設けられていた。新装の水晶宮では音楽会やさまざまな展覧会のほか、フラワー・ショー、犬や鳩、兎の品評会、仕掛け花火など、ありとあらゆる種類の大衆娯楽やショーが提供された。

普段五〇人をこえる日本人の団体を見たこともなかったイギリス人たちは、水晶宮で遊ぶ日本人の周囲に押し寄せ、脱帽して敬礼したり、ハンカチを振ったり、歓呼の声をあげたりした。当時イギリス人、ことにロンドン市民の無愛想は、世界的に有名であった。したがって外国人に対して傲慢に振る舞う彼等が、日本人をこれほど歓迎したことは実に稀有なことであった。思いがけぬ多数のイギリス人の歓迎に接して、一行はその喜びを次のように述べた。

> 如何にも同盟国に来りたる心地にて一行一人としてロンドンを喜ばざるはなし」また楚人冠も「タイムス」「クロニクル」「メール」等の「諸新聞は何れも我一行を歓迎し其一挙一動を詳報せざるはなし」と書いた[13]。

「世界一周会」の会員たちは、五月九日午後サットン・プレースのノースクリフ卿の別邸に招かれたため、臨時列車でロンドンを出発した。ノースクリフ卿は『アンサーズ・トウ・コレスポンデンス』を創刊（一八八八年）以来、次第に手腕を揮い、保守党の機関誌『デイリー・メール』を創刊（一八九六年）するなど、安価多売政策をとり新聞の大衆化を実現したイギリス新聞界の重鎮の一人であった。別邸に到着した一行は落ち着いた雰囲気がただようチューダル王朝時代の古建築をくまなく巡覧したあと、花園で開かれた盛大な園遊会に参加した。園遊会には一行のほか男爵に縁故のある外国の紳士、淑女も招待されていた。一行は午後六時三〇分発の臨時列車で名残をおしみつつロンドンへ帰った。往復とも停車場と男爵邸との間は、二〇余台の馬車で送迎された。沿道には一行を一目見ようと黒山の群衆が押し寄せた。彼等は帽子、ハンカチーフ等を振り、歓声をあげて一行を歓迎した。「世界一周会」の会員たちは静かな林やたっぷり水をたたえた水路に囲まれたイギリスの田園風景に接したのみならず、素朴なイギリス人たちの歓迎に接し、国際親善の宴の素晴しさを満喫することができた。イギリス到着以来、一行は幸運な出会いの連続であった。水晶宮、ノースクリフ卿の園遊会のほか、市長邸訪問、イートン大学見学、上下両院訪問等のさまざまな機会をつうじて、イギリス人との教え切れない出会いがあった。会員一人一人はあらためて、国際親善に貢献している自らを誇らしく思うとともに、限りなく甘美な思いに包まれた。

会員の川田鐵彌はイギリスびいきの一人であった。彼は帰国後の六月二九日付『東京朝日』紙上で、東京府の小学校長の立場から紳

士の国と称されるイギリスより、日本の少年が学ぶべき事項を以下のごとく明快に示した。

英国の紳士淑女は、たとえ、小さい子供が外人を見ても、知らぬ面持をして、イヤガル様な見方をしません。小学校児童などの（一）人などに、指をさして、さゝやかないこと（二）誰一人、猫、犬馬などをいじめるものなきこと、（三）人の迷惑になることをせざること（四）宝物などに、別に差図なくとも手を触れざること（五）公園の花など、少しも折らざること

日本の小学校教育のモデルとして、イギリス・スタイルが望ましいという川田の主張は、当時の自由主義的教育運動に共通する意識でもあった。つまり穏健なリベラリストが、安心して共通の尺度にできる知識や経験、即ちコモンセンスの養成こそ、日本の教育モデルにふさわしいというのである。だがなにより重要なことは、我国にもかつて若衆宿や娘宿のように、部落の青少年や少女たちが自発的に生活を共にするなかで、親睦や共同体のしつけや掟を自然に学ぶ場があったということである。しかし文明開化政策を推進した明治政府は、そうした慣習にたいして後進的な慣習として好意を寄せなかった。若衆宿や娘宿は「封建的」として批判され、さらに地域にひろく教育が普及したこともあり、結局は消滅する運命をたどった。川田鐵彌会員はイギリス流のアットホームなパーティー文化を基礎として生まれた社会的なマナーやジェントルマン・シップを、積極的に我国の学校教育に導入することによって、生徒を教育することを、イギリスからの帰朝報告で力説したのである。イギリス帰りの紳士川田会員にとって、前述した若者宿や娘宿は、日本人の民俗の低さ以外の何者でもないと思ったに違いない。いわゆる「大正自由主義教育運動」の影響が生みだしたさまざまなひずみは、今日なお尾をひきつづけている。欧米崇拝や「脱亜入欧」的価値観は、戦後、とにかく社会の表面からは消え去ったが、未だにアフターヌーン・ティーに象徴される優雅なイギリス文化にたいする憧憬が戦後の日本人をひきつけている。

翻って二〇世紀初頭のヨーロッパを中心とした国際情勢をみておこう。言うまでもなく、この時代における国際対立の基調は、イギリス、ドイツ間の対立である。その集中的表現は、一八九八―一九〇〇年、ドイツ艦隊政策の展開に示される、ドイツ、イギリス、二国間の激烈な建艦競争であった。一方アメリカにおいても、一八九八年の米西キューバ戦争を契機に海軍拡張が急速に進展していた。ドイツが戦争準備体制へとつき進んだ基礎には、一八七〇―七一年の普仏戦争以降の目覚しい経済成長があった。この時期ドイツは列強から軍国主義と誹謗されつつも、重工業を極力推進した。かくして以前はロシア同様の農業国であったドイツは、活力を取り戻し一

躍重工業、就中クルップを基軸とした鉄鋼業においても、イギリス、アメリカと比肩もしくは凌駕するに至った[14]。「世界一周会」の会員たちは、このような緊張の度を増しつつある国際情勢の推移を、どのように考えていたのであろうか。

十八世紀の中葉、仏の文豪ヴォルテールは、隣邦ドイツの国勢振はざるを罵詈して、『イギリスは、海を支配し、フランスは、陸を支配し、ドイツは雲を支配す』と言へるも、今やドイツ連邦の国勢は、之を其富に徴するも、之を其武器に訴ふるし、之を其文物に見るも、実に畏敬するべきものあり。誠に、ドイツ現皇帝が、国家万能主義の下に、盡しし所のものは、莫大なり。旧怨を以てせば、ロシア、フランス二国は、ドイツ国勢の増進を喜ばざるは、当然の事なるべし。然り而して、社会党の跋扈と唯物主義の瀰漫とは、殆ど世界各国の警戒を要する問題にして、就中ドイツ、ロシア二国は、危機屢目前に迫るものあり。反目の中に、親善の姿あるも、其消息を知るに難からず。眼を転じて、慣習と教会との下に、人心を支配せるイギリスの国勢を察するに、独特の長所極めて多し。英独二国の互に相競えるは、両将相容れざるの類なるべし。アメリカ合衆国は、人民を主脳と為し、以て国を建てたる処なれば、自ら其趣あり。老婆の如きロシア、令嬢の如きフランス、壮丁の如きドイツ、紳士の如き英国、少年の如き米国が、半世紀の後、如何なる面貌を以て、世に立つやは、大に思慮すべきことなり。海外に旅行し、男女交際の趣を異にせるを目撃し、舞踏に、美術に、建築に、趣味と嗜好を異にせるを視察し直に風俗、人情を誤解するは、識者の為すべきことに非ざるべし。又音楽、遊戯、カルタ其他の遊戯に耽るを見て、国民性格の浮薄を言説するも、是れ小国民の弊なるべし。

とは六月二三日付『東京朝日』に掲載された川田鐵彌の「我が欧米観」の一節である。教育者特有の重々しくなんともむずかしい文章ではあるが、彼はここにおいて、アメリカ・デモクラシーの政治運営能力の評価、フランス、ロシアをしのぐ新興ドイツの認知、ドイツ、ロシアにおける社会主義者の跳梁にたいする警告、ドイツ、イギリスの対立に象徴されるヨーロッパに明日はあるかという疑問、開けゆく二〇世紀のシンボルである男女交際は、欧米の生活文化の結実であること、そしてレジャーは楽しみであるとともに知的な挑戦であること等を論じている。

ではつぎに前茨城県代議士大久保不二の欧米観はどうであろうか。彼は六月二六日付『東京朝日』に寄稿した「世界一周観」において、つぎのように述べている。

アメリカ人は唯金之れ貴しとし身分の高下を問わず学生たると大臣の倅たるとを問はず自ら労働に就き假令零碎の金たりとも之を儲け唯利殖の途を計るに汲々たるを見るまゝイギリスに至りては然らず品格を重んじ自ら紳士として其態度を慎み他同人の接するも紳士を以て之を遇し覚えず人をして襟を正さしむ……フランスは高利貸、元来同国は自国の不景氣には関せずドシドシ利息よき他国の公債を買込みて平然たる観あり……同国は一般華美に流れ表面非常に富豪然たる傾きあるも表裏暗流予測し難く恰も未だ爆発せざる噴火山上に建てられたる家の如き観あり……ドイツは実に恐るべく侮るべからず其の最も恐るべきは商工業の発達にして欧米各地至る処としてドイツ商の旺盛を極めざるはなくアメリカシカゴの如きドイツ人の在留四十万を以て数う……イタリアに至りては唯美術の壮麗精巧に驚くの外なく口に美術を語るものは須らく先づイタリヤに於ける新旧美術の製作を実見し初めて真の美術を語るべし……ロシアに入りては唯軍人と寺院の華麗なるを見るのみなりしが一日……会員中余一人ロシヤ議院を見るを得たり実に議院内に於ける秩序整然たるは日本以上にて英米に於けると正反対なり

人によって、その人の職業観や価値観によって、同じ旅行経験を共にしても、語られる世界諸国についての印象はまるで違うものらしい。川田と大久保の二つの文章はそのよき実例であるといってよろしいだろう。大久保の文章のなかではっきりしていることは、アメリカ人の経済活動についての途方もないほどの偏見であろう。つまり彼に言わせると、アメリカは拝金主義者がつくった成上り者の国だというのである。たしかにアメリカは表面的には拝金主義の国であった。しかしアメリカの実情は、目覚ましい大量消費社会形成への胎動を背景に、無数のあまり目立たない革命的変化が、工場、金融業、商店、百貨店、学校、農場、家庭等に波及していた。野村会員がウォール・ストリートを見学した夜は、眠られないほど興奮したと述べていたように、アメリカ人の活力によって、経済生活のあらゆる場所に、未知の新世界がつくり出されていたのである。大久保会員の国際認識の原点は、議会主義を成功させたイギリス資本主義の精神の積極的肯定にあるようである。彼はこの立場からフランスの資本家が大量に日本や他国の公債を買い込む状況を、高利貸的行為であると軽蔑し、フランス市民生活の間断なき繁栄は砂上楼閣に過ぎぬと斬りすてる。これに反して彼は新興ドイツに一目置くのみならず、新しい商品やサービスを世界に広めつつある、ドイツ商人の活力を高く評価する。

また彼はイタリアは単なる美術国であるということくらいしか知らなかった。ところがイタリアは一八六一年、リソルジメントと称する統一独立運動により、サヴォイア王朝のもとで、立憲君主制に

立つ統一国家を形成し、以降近代国家として農業と工業の格差などに直面し我国と同様に苦難の道を歩んでいたのである。あまりに独断と偏見にみちた大久保会員の文章ではあるが、ロシアの首都セント・ペテルブルグ滞在中単独でロシア議会を訪問した一節は興味深い。彼はそこでロシア議員たちの品格の高さを教えられ、日本やイギリス、アメリカの議員連中のマナーの悪さを反省する姿勢を示していたからである。

だんだん予定された枚数も少なくなっていくので問題をさきに進めよう。「世界一周会」の一行はモスクワ市内を見学後、六月七日、停車場からシベリア横断鉄道の列車に乗車して、帰国の途についた。クック社から社員が日本まで同行し会員の世話をするので、会員は長時間の列車の旅も、少しも不安を感じることはなかった。六月八日夜、寝台車で一寸した事件が勃発した。それは二階のベッドから会員中の某学士が転がり落ち、したたか頭と胸を打撲したのである。この事件を契機に、今迄人に笑われることを恐れて、あえて告白しなかった十数人の会員が、ホテルのベッドから転げ落ちたことを白状したために、車中は大笑いとなった。六月一二日、クラスノイアルスク駅の手前の小駅で、列車交換の待ち合わせのために、三〇分ばかり列車が停車した。会員たちは同車中のロシア人乗客と打連れて、野原を散歩したり、花を摘んだりして遊んだ。同日午後一〇時過ぎ、二十数名の会員はきせずして食堂車に集った。彼等は一会員の病気全快祝いのため、シャンパンを抜き、大宴会を開いた。宴たけなわになるにしたがって、会員は、それぞれ自慢の歌を披露した。食堂車中に追分節、ラッパ節、元冠の唄、はてはイタリアの歌までとびだした。もり上がった会員たちは居合わせた列車長のためにシャンパンをあげて、「ウラー」を三唱した。午前零時、食堂車の閉鎖時間になったから、会員等は君が代を合唱して引き上げた。会員たちは口々に、もしロシア語でロシア国歌を合唱できたら、同席していたロシア人たちに最高のプレゼントになったことだろうと話しあった。

六月一八日、午前一〇時一〇分列車は、ついに終着駅ウラジオストックに到着した。翌一九日正午、一行はウラジオストックから大阪商船株式会社の鳳山丸（二五〇九トン）に乗船し敦賀へと向かった。六月二一日午前六時、鳳山丸は敦賀港に入港した。日本最初の記念すべき世界一周のグランド・ツアーは終了したのである。横浜港出港から数えて九六日、全行程は約三万六六三五キロメートルであった。波止場付近に鳳山丸が繋船されると、数十発の花火が打ち揚げられ、敦賀町の一大歓迎イベントの開始がつげられた。満艦飾をほどこした三隻の船には、正装して威儀を正した町長や町の有力者たちが乗りこみ、盛大に音楽を奏して鳳山丸の周囲を廻った。敦賀商業学校生徒を満載した船も、鳳山丸に接近して、万歳を連呼した。会員一行を波止場に迎えたのは、東京、大阪両朝日新聞社の村

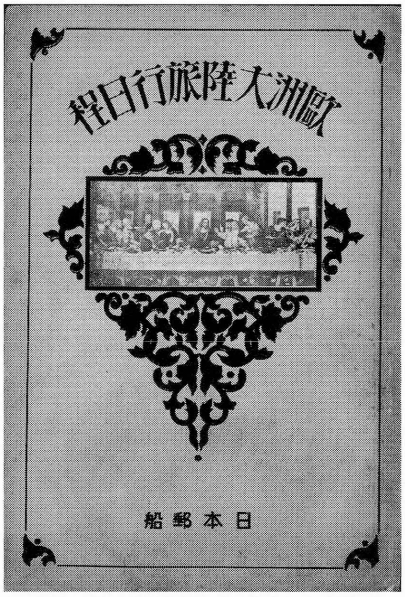

図6　日本郵船会社『欧洲大陸旅行日程』1928年（筆者蔵）

山、上野両社長のほか、敦賀町民六〇〇〇人、そして敦賀町芸者三〇名等であった。会員たちは帰国当日に町をあげた歓迎会が待ちうけているなどとは、まったく想像もしていなかった。それだけに会員はいずれも喜色満面笑みにあふれて、町主催の歓迎会に出席した。彼等は町長に感謝を表するとともに、会の名をもって金百円を寄附した。五〇名前後の海外旅行ツアーの帰国に、なぜ町主催の歓迎イベントを開催するのか、と思っている戦後生まれの若い読者も多いと思う。だが、二〇世紀初頭、海外旅行者は出発前には、親兄弟や親戚の人々と水盃を交わす習慣になっていたのである。だから日本人五〇人以上の世界旅行団が、敦賀港に無事に到着したことは、市としても祝賀すべきことでもあり、最大のビッグ・イベントでもあった。午前一〇時、一行は敦賀ホテルで開催された東京、大阪両朝日新聞社主催の解散式にのぞんだ後、大半の会員はなつかしい故郷目ざして、午後一時一四分発列車で、別れを惜しみつつ家路についた。

むすび

今日、豪華客船による世界一周ツアーは大変な人気となり、企画発表と同時に申込者が殺到しているという。我国における世界一周ツアーの源流をたどっていけば、それは一九〇八年の「世界一周会」のグランド・ツアーにつきあたる。二〇世紀初頭の日本では、気軽に世界一周することは夢であった。しかし会員たちはたった一回の体験であったが、その夢を身近なものにしてしまった。その意味で言うならば、彼等は世界一周旅行のパイオニアといってもいいだろう。だが現代、世界一周ツアーのニュースがにぎやかであるにもかかわらず、かつての「世界一周会」の旅は、まったく忘却されている。つまり歴史感覚が平面化して過去の体験や遺産が軽視されている。なんとも皮肉な展開というべきか。

大型汽船や大陸横断鉄道等を利用したマス・ツーリズムは、まずは海外の人々との交際、社交、そして学習であり、なりよりも個々の旅人の心身を用いた自由なレジャー活動であったことが重要であろう。旅はたしかに身体を動かすレジャー活動である以上に、感性の覚醒である。「世界一周会」に参加した旅人の大半の人たちは当

初からそのような心身を用いた自由なレジャー活動として、ワールド・トラベルを受けとめていたとは思われない。だが拙稿が明らかにしたように、彼等もまた日程を重ね、楽しい経験や失敗の体験をくり返す過程で、旅のイメージを変化させた。真の旅の歴史は確かにそうしたイメージの変化に注目するところから始まることは言うまでもない。「世界一周会」を対象とした研究が従来無かったということは、アカデミズムにおいて、心身を用いた自由なレジャー活動と結びついた旅のイメージについての理解が必ずしも正しく受けとめられなかったからではないだろうか。人々のレジャー感や身体感覚は時代の移り変わりとともに変化していくが、こうしたイメージや身体感覚の変化を受けとめようとする余裕が失われているように思われる。

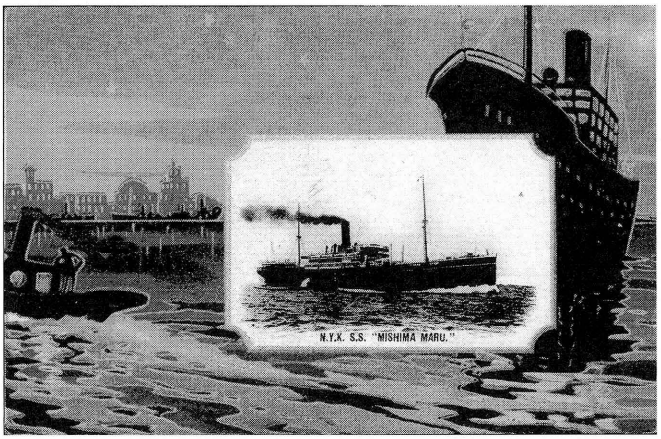

図7　絵葉書：日本郵船会社の三島丸（1908 年竣工、8500 トン、欧州航路）（筆者蔵）

旅というものは、考えれば考えるほど、様々なテーマが浮かんでくる。とはいえ筆者はかねてから忘却されてきた「世界一周会」の旅について書きたいと思い続けてきた。今回、旅の達人白幡洋三郎教授のすすめにより、そのささやかな念願が果たせたことを深く感謝している。最後に一言、本論文の最初の読者であり、執筆中も私を終始助けてくれた妻由紀子に感謝したい。

付記

一、本書の主要文献には、一九〇八年の『東京朝日』、東京朝日新聞社編『東京朝日―三十年の沿革と新築概要』（東京朝日新聞社、一九二〇年）等を用いた。

二、用字・用語は原則として常用漢字・現代仮名遣いを用いた。

三、主要文献は、総ルビであるが、不必要と思われるものは割愛した。

四、外国名の漢字表記は、カタカナに改めた。

五、年号は原則として、西暦とした。

注

1 新井政治『レジャーの社会経済史――イギリスの経験』東洋経済新報社、一九八九年、一〇四―五頁

2 園田英弘『世界一周の誕生――グローバリズムの起源』文春新書、二〇〇三年、第五章参照

3 前掲書、一七八頁

4 田中喜一『観光事業論』観光事業研究会、一九五〇年、五八―六二頁

5 村上順二編『野村得庵　本伝上』野村得庵翁伝記編纂会、一九五一年、一九六頁

6 竹村民郎「一九世紀末葉ハワイにおける日本人移民社会の日本回帰――多民族社会における日本人移民のアイデンティティ形成に関連して――」『大阪産業大学経済論集』第二巻第二号、二〇〇一年、一一四―一五頁

7 前掲『野村得庵　本伝上』一九八頁

8 ゼームス・ブライス原著、人見一太郎訳述『平民政治（The American Commonwealth）』民友社、一八九一年、二四九一頁

9 ブライス著、松山武訳『近代民主政治』第一巻、岩波文庫、二〇〇〇年、四頁

10 「一周会員野村美智子談」『東京朝日新聞』一九〇八年六月一三日

11 前掲『野村得庵　本伝上』二〇〇―二〇一頁

12 前掲書、二〇〇―二〇三頁

13 『東京朝日新聞』一九〇八年五月七日

14 竹村民郎『独占と兵器生産――リベラリズムの経済構造――』勁草書房、一九七一年、二八―三七頁